

高倉寺宝積院蔵「星曼荼羅図」の現状模写研究

博士前期課程 日本画領域 兼岩 飛鳥

《原本について》

大阪府指定文化財 絹本着色 120.2×62.1cm 鎌倉後期～南北朝時代（14C） 高倉寺宝積院所蔵

現代の私達の認識と異なり、古代の人々にとって暗い闇夜を照らす星はより神秘的であり、日月と共に生活に欠かせないものであつただろう。日本では星座の知識は仏教と共にインドより伝わり、密教や陰陽道などと混じりながら日本独自の星曼荼羅図へと形作られていった。星曼荼羅図は主に延命、息災の修法として極秘に使われたが本研究の対象作品である大阪府高倉寺宝積院蔵星曼荼羅図は数ある図の中でも特徴的な構図で描かれている。中央に熾盛光仏（北極星を神格化した菩薩）を本尊として配置し、その周囲に九曜星（太陽、月、水星、金星、火星、木星、土星、計都星、羅睺星）、十二宮（黄道12星座）、二十八宿（月の一周28日の通り道にある星座）を円形で描き、上部に北斗七星と妙見菩薩、下部には運命を司る閻魔天など道教の神々が描かれている。道教神が星曼荼羅図に含まれているものは他に類例がない珍しい形式である。また、諸尊に細密な描写がなされており、絵画性も高いことが確認できる。

《模写の工程》

1. 上げ写し

薄美濃紙にドーサを引き、仮張りをしたものを原寸大の写真の上に当て墨で上げ写しを行った。



1. 上げ写し

2. 基底材の準備

熟覧の際に原本の絹目を数え、原本の目に近い手織り風の絹を選んだ。古色を出す為に染色を行うが、染料にはどんぐりとたまねぎの皮を使用し、テストを行いながら少しずつ近づけていった。明礬で媒染を行いながら、流水に浸して洗い乾燥させた。その後絹を木枠に張り込み、ドーサを表と裏1回ずつ引いた。



2. 絹張り

上げ写しした薄美濃紙を絹の下にあて、墨線にて写し取った。



3. 白描図

4. 彩色

まず、剥落部分を混色した絵具（放光堂臘脂末A+黄土+焼白緑）で薄く塗り、裏彩色（絹の裏より彩色）を行った。裏彩色の現存箇所は原本で使われた絵具を推測して古色を含まない色や胡粉を混ぜた色で、絹目を詰めるように彩色した。絹の表の彩色は絵具を焼くなどして退色の効果を含んだ彩色を行った。



4. 彩色手板

5. 仕上げ

黄土、焼白緑、土系絵具を合わせて作った古色を全体に薄く塗り、雰囲気や原本に合わせる。中央の主尊背後部分や衣服文様の金色の線を金泥で描写した。また彩色によって薄くなった墨線を起こし彩色を終えた。



5. 裏彩色

6. 額装

肌裏紙はどんぐりと矢車の混合染料にて染色した薄美濃紙を絵絹の裏面に裏打ちした。裏打ちした絹を袋張りした木製パネルに張り込み、本来は軸装に使われる金欄を含めた裂を周りに飾り額装した。

《まとめ（総括）》

模写を通して、抑揚のある線描きや裏彩色など原本の技術を直に感じ取り、鎌倉時代特有の表現を学んだ。諸尊の細密な表情の変化を見つけ、一体一体理解して描くことによって当時の人々が深く信仰した星の持つ強い宇宙の力を感じ取り、絵画性を把握することに重点を置き模写した。諸尊の柔らかな表情や色彩の細かな塗りわけなどに作者独自の表現を見つけることが出来た。